



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 26 主日 B 年 (2024 年 9 月 29 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：民数記 11 章 25 — 29 節

第二朗読：ヤコブの手紙 5 章 1 — 6 節

福音朗読：マルコによる福音書 9 章 38 — 43、45、47 — 48 節

情熱とねたみ

今日の第一朗読を含む『民数記』11 章は二つの物語から構成されています。

1. 新鮮な肉を求める民の泣き言、
 2. モーセに与えた民を裁くための霊を分かち合うための七十人の長老の選出。
- どちらも『出エジプト記』に並行箇所があります (出 16 章、18 章 13 — 26 節)。

今日の朗読箇所の背景は次の通りです。一回目の人口調査から二回目の人口調査へと至る三十八年間の旅の始まりに、イスラエルの民は契約の櫃と共に歩き始めますが、すぐに「肉を食べたい」と不満を言います (11 章 1 節)。民の指導に疲れたモーセは、神さまに訴えます。「わたし一人では、とてもこの民すべてを負うことはできません。わたしには重すぎます。どうしてもこのようになさりたいなら、どうかむしろ、殺してください。あなたの恵みを得ているのであれば、どうかわたしを苦しみに遭わせないでください」 (11 章 14 — 15 節)。神さまはモーセの負担を軽くするために七十人の長老を立てるように指示し、彼らに霊が降ります。

29 節の「ねたむ心をおこしている」に注目してください。原文はカー、その動詞形はカーナーとなります。「ねたむ・嫉妬する」と「情熱を傾けて仕える」の二つの意味があります。情熱を傾けて献身することと、ねたみが生じることは紙一重かも知れません。ヨシュアはモーセに献身しているからこそ、「わが主モーセよ、やめさせてください」 (28 節) と注進をしたのでしょうか。それは、他の人に神の霊が働いたことへのねたみ、うらやみからだったからかもしれません。しかし、モーセはすべての人が預言者となればよいと考えています。つまり、自分が体験している神との霊を通しての「交わり」が、多くの人にも同じように体験してもらいたいと考えているのです。

福音朗読に移りましょう。イエスさまは受難の予告を最初に行ったときから、ご自分に従う弟子のあり方を教育していきます。今日の朗読箇所は二回目の受難の予告に続く、弟子とは誰かを語る箇所となります。

38節の「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました」は興味深いです。ここでのヨハネは、ゼベダイの子ヨハネのことです。初代教会ではイエスさまに従わずに、イエスさまの名によって悪霊払いをする人びとがいました(使19章13節以下)。イエスさまが活動していた時代にも、すでにそのような人たちがいたのかも知れません。「わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」には、弟子たちの特権意識と閉鎖性が垣間見えます。「名」はその人そのものを指しますから、イエスさまの名による悪霊払いは、イエスさまとの関わりが前提となります。弟子たちは、自分たちこそがイエスさまに献身的に仕えていると自負しているのでしょうか。だからイエスさまの「名」を独占できると考えています。

しかし39節で、イエスさまは「やめさせてはならない」と言います。なぜなら、イエスさまの「名」は弟子たちの管理にあるのではなく、弟子たちがイエスさまの「名」のもとにあるからです。

42節の「つまずかせる」は、37節の「受け入れる」と対応するのでしょうか。「小さな者」(ミクロス)は弱い立場にある人と理解してもよいですし、イエスさまの「名」を通して神を信じる人という意味でも理解できるでしょう。信仰の観点から「取るに足らない未熟な者」を指します。このような人びとはファリサイ派から見れば、律法を守れない子供同然の人びとであり、軽蔑の対象となります。しかし、イエスさまの目から見ると軽んじてはならない人々です。なぜなら、神さまの目は彼らに注がれるからです。「大きな石臼」は直訳すると「ろばの挽き臼」。ろばが回すために動かすほどの大きな臼の意味です。「すべての人に仕える者になりなさい」の「仕える」は「食卓で給仕する」が本来の意味です。新約聖書では特にイエスに従う弟子の在り方、キリスト者の在り方を表す語となりました。

お知らせ

10月27日はロザリオ祭です。

10時半からアントニオ会館の庭でミサとなります。

ミサ後、軽食をいただきながら懇談しましょう。

9時半のミサはありません。